

中学生の高校選択の現状と高校の情報提供の在り方（概要）

MJE11007 吉野浩一

【要旨】

本研究の目的は、中学生の高校選択の現状と高校の情報提供の実態について分析することにより、中学生の高校選択の現状に対応した高校の情報提供の在り方を明らかにすることにある。

分析にあたり、まず高校選択の現状を把握するため、埼玉県公立高校入学者選抜制度等の変更が高校選択に与える影響について分析し、「偏差値追放」後も偏差値が志望校決定率や進学率等に影響を与えていること、「学区撤廃」により高校選択の幅が拡大した一方で特定の旧通学区域に進学志望が集まっていること、「推薦入試制度の変更」以降も偏差値による高校選択が行われ特定の高校に進学志望が集まっていることなどを明らかにした。

次に、普通科のある埼玉県立全日制高校および在籍する1年生を対象に実施した2つの調査結果について分析し、学校説明会が高校選択の主要な情報源であること、中学生が期待する情報と高校が提供する情報に齟齬があること、学力判断の主要な情報源が業者テストであること、高校選択に塾の影響があることなどを明らかにした。

これらの分析結果を踏まえ、高校の情報提供の在り方に関して、「入学者選抜における学力検査結果を中学校に提供すること」、「学校説明会の実施内容を再検討すること」、「塾との連携を検討すること」の3つの政策提言を行った。

はじめに

本研究の出発点は、中学生がどのように高校を選択しているのか、また、高校は中学生の高校選択に対応した情報を提供できているのかという「高校選択と情報提供に関する疑問」である。もし、学校説明会を代表とする情報提供が中学生の高校選択に役立っていないとしたら、実施にかかる労力は他に費やした方が効率的であり、内容に不足があれば、すぐにでも改善を図るべきである。

1. 研究の概要

1.1 問題意識

本研究の問題意識は、高校進学率が約40年間にわたり90%以上である状況の下で、中学生はどのように高校選択を行っているのか、また、高校は中学生の高校選択の現状に対応した情報を提供できているのか、さらに、特色がわかりづらい普通科を志望する中学生はどのように高校選択を行い、普通科のある公立全日制高校(以下、「公立全日制普通科高校」という)は高校選択の情報をどうとらえ、どのように提供しているのかである。

1.2 先行研究

中学生の高校選択に関する研究には、高校選択過程での中学生の意識や要因、高校入試制度が高校選択へ与える影響、また、高校選択能力そのものや高校進学動機尺度等の研究がある。

1.3 研究の目的と方法

本研究では、先行研究で扱われていない、公立全日制普通科高校に進学した生徒の高校選択の現状を明らかにし、その現状と公立全日制普通科高校の情報提供の実態との比較を通して、高校の情報提供の在り方を探ることに重点を置き、研究の目的を「中学生の高校選択の現状と高校の

情報提供の実態について分析することにより、中学生の高校選択の現状に対応した高校の情報提供の在り方を明らかにすること」とした。研究の方法は、既存データによる分析と調査結果による分析の2つとした。

2. 中学生の高校選択の現状

2.1 県公立高校入学者選抜制度の概要

埼玉県の公立高校入学者選抜制度等の変遷から、現在でもその制度が維持され、公立高校進学を希望する多くの中学生に関係のある、平成5年のいわゆる「偏差値追放」と平成16年の「学区撤廃」、平成17年の「推薦入試制度の変更」から、高校選択の現状を検討した。

2.2 偏差値追放の現在

「偏差値追放」は高校選択にどのような影響を与えたのであろうか。

埼玉県の中途退学率は平成6年以降上昇しており、高校進学動機が高校入学後の中途退学と関連することは先行研究からも指摘されている。



図2-1 県内中学生の志望校決定率の推移

注：「志望校決定率①」は10月1日現在、「志望校決定率②」は1月10日現在(平成17年以降は12月15日現在)。

また、図2-1から、「志望校決定率①」と「志望校決定率②」に平成6年以降開きがあること、図2-2から、「9月の業者テスト申込率」と「志望校決定率②」に正の相関があること、さらに、図2-3から、「全日制高校卒業率」と「全日制志望校未決定率」（「志望校決定率②」から「志望校決定率①」を減じた率）に負の相関があることがわかる。

これらのことから、中学校を会場にした業者テストが廃止され、業者テストを自ら申し込み受験しなければ中学生は偏差値を知ることができなくなった結果、偏差値を把握していない中学生の志望校の決定時期を遅くさせ、志望校未決定率を高くし、中途退学を含む卒業率に影響を与えている可能性があることが明らかになった。

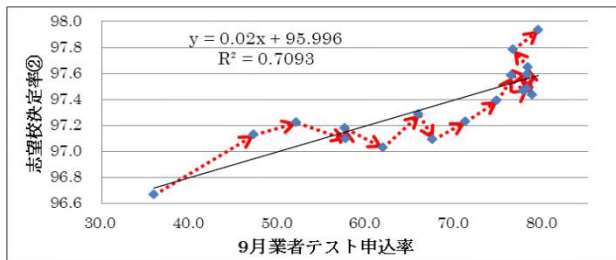


図2-2 県内中学生の業者テスト申込率と志望校決定率の相関

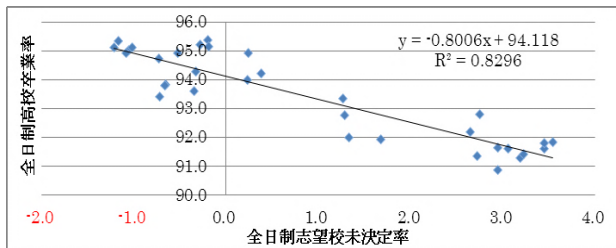


図2-3 全日制高校における志望校未決定率と卒業率の相関

2.3 学区撤廃と高校選択

「学区撤廃」は高校選択にどのような影響を及ぼしたのでしょうか。

図2-4から、年を経るごとに他通学区域への進学者率が高くなっていることがわかる。また、「学区撤廃」により進学者の出入の多い通学区域である1学区南部と2学区中部にある全日制普通科高校46校を対象に作成した図2-5から、「学区撤廃」の前後年の各高校の「進学志望率②の差」と「進学志望率②」（1月10日現在）に有意な相関はなく、「進学志望率②の差」と偏差値にも有意な相関はない。

図示はないが、「進学志望率①の差」（10月1日現在）においても同様に有意な相関はなく、「学区撤廃」の8年後の平成23年においても、「進学志望率①の差」と「進学志望率①」に負の相関があるものの、他については有意な相関はない。

これらのことから、「学区撤廃」によって、中学生はすべての公立全日制普通科高校に進学できることになり、高校選択の幅が拡大した結果、特定の旧通学区域にある高校へ進学志望が集る傾向が生じたものの、進学志望率の高い高

校や偏差値の高い高校へ進学志望が集まっている傾向は現在まではみられないことが明らかになった。

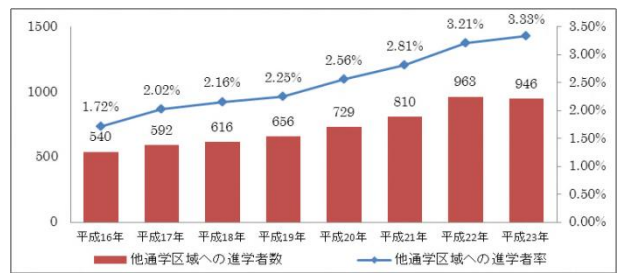


図2-4 他通学区域への進学者数と進学者率の推移

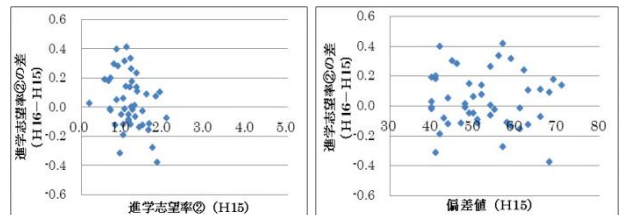


図2-5 1学区南部と2学区中部の公立全日制普通科高校における平成15年進学志望率②の差(平成15年と平成16年)と進学志望率②、偏差値の相関

2.4 推薦入試制度変更以降の高校選択

「推薦入試制度の変更」以降、高校選択にどのような傾向があるのか。

図2-6から、平均入試実倍率と偏差値に正の相関があり、また、表2-1から、偏差値上位ランクの不合格者数が多いことがわかる。後期募集で不合格となった3,967人は、公立全日制普通科高校を第1志望としながらも私立高校に入学した人数と考えられる。

これらのことから、前期募集における校長推薦を自己推薦にした「推薦入試制度の変更」によって、誰でも前期募集を受験できるようになり高校選択の幅は拡大したが、依然として偏差値が高校選択に影響を及ぼしているため、特定の旧通学区域にある偏差値の高い高校の後期募集における不合格者数が多い状況にあることが明らかになった。

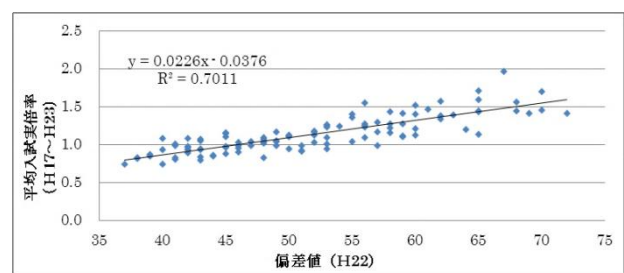


図2-6 平均入試実倍率（平成17年から23年）と偏差値の相関

表2-1 平成23年度公立全日制普通科高校の偏差値ランクと前期募集・後期募集の不合格者数

	受検者数	入学許可候補者数	上位不合格者数	中上位不合格者数	中位不合格者数	中下位不合格者数	下位不合格者数	不合格者総計
前期募集	32,782	21,402	5,082	2,363	2,381	992	925	11,380
後期募集	10,852	6,885	1,923	618	602	403	421	3,967
		偏差値ランク	60以上	54~59	47~53	43~46	42以下	
		該当校数	22	20	28	19	18	

3. 高校選択と情報提供の調査分析

3.1 調査の概要

1年生が在籍する埼玉県立全日制普通科高校100校に「学校の情報提供に関する調査」(以下、「提供調査」という)と「高校選択に関する1年生振り返り調査」(以下、「振返調査」という)を依頼し、83校、2,989人(男1,420人・女1,569人)から回答を得た(平成23年11月)。

3.2 情報源と情報提供の目的

図3-1(振返調査④)、図3-2(振返調査⑥)から、高校選択の情報源は「高校の学校説明会」(53.1%)が最も多く、生徒の96.1%が高校選択のために学校説明会に参加しており、学校説明会が高校選択の主要な情報源となっていることがわかる。

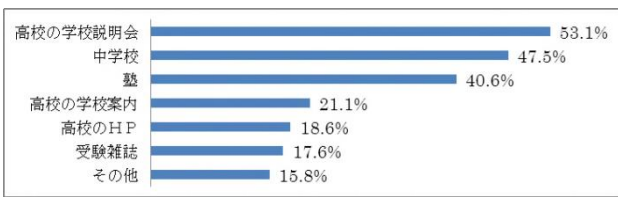


図3-1 高校選択の情報源

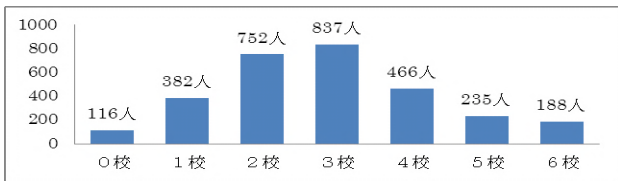


図3-2 高校選択のための学校説明会参加人数

3.3 高校選択の時期

表示はないが、志望校を「考え始めた時期」(振返調査①)と「決定した時期」(振返調査⑨)のクロス表から、高校選択の時期は「中学3年生の4月から8月」に考え始め「中学3年生の9月から12月」に決定するパターンが最も多い。

図3-3(振返調査⑤)から、学力判断の情報源は業者テスト(偏差値)が最も多く(79.8%)、中学生は偏差値を利用して志望校を決定しており、表3-1(振返調査⑤⑨)から、偏差値を利用しない生徒の高校選択の決定時期が遅れる傾向にあることが明らかになった。

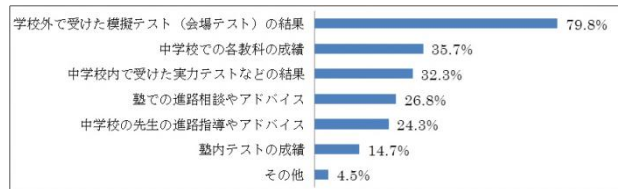


図3-3 高校選択における学力判断の情報源

表3-1 業者(会場)テストと志望校を決定した時期のクロス表

	志望高校を最終的に決定した時期					合計
	小学校のころ	中学1年生のころ	中学2年生のころ	中学3年生の4月から8月	中学3年生の9月から12月以降	
会場テストの結果をした	0.1%	0.6%	2.7%	16.2%	51.4%	2262
学力判断としない	1.4%	2.2%	2.6%	15.1%	38.9%	578
合計	11	27	77	454	1388	2840

注: $\chi^2 (df=5, N=2840) = 64.274$ Cramer's $V = .15$ $P < .01$

また、表示はないが、業者テスト(偏差値)の利用(振返調査⑤)と偏差値3段階のクロス表から、偏差値を利用しない生徒は偏差値下位群の高校に多く、高校選択の決定時期が遅れる生徒は偏差値下位群の高校に多いと考えられる。

表3-3(振返調査①④)から、学校説明会を情報源とした生徒の志望校の決定の時期が早いことがわかる。表3-2(振返調査④⑨)、表3-3、表3-4(提供調査②)から、どの時期の学校説明会にも考え始めた時期の生徒と決定した時期の生徒が混在して参加していることが明らかになった。

表3-2 学校説明会と志望高校を考え始めた時期のクロス表

	志望高校を考え始めた時期					合計
	小学校のころ	中学1年生のころ	中学2年生のころ	中学3年生の4月から8月	中学3年生の9月から12月以降	
学校説明会をした	2.5%	9.4%	20.3%	37.6%	24.5%	1579
情報源としない	2.4%	7.4%	15.1%	28.5%	30.3%	1395
合計	72	251	531	992	810	2974

注: $\chi^2 (df=5, N=2974) = 118.501$, Cramer's $V = .2$, $P < .01$.

表3-3 学校説明会と志望高校を決定した時期のクロス表

	志望高校を最終的に決定した時期					合計
	小学校のころ	中学1年生のころ	中学2年生のころ	中学3年生の4月から8月	中学3年生の9月から12月以降	
学校説明会をした	0.0%	0.8%	2.4%	18.1%	54.7%	1508
情報源としない	0.8%	1.1%	3.1%	13.5%	42.4%	1340
合計	11	27	78	454	1393	2848

注: $\chi^2 (df=5, N=2848) = 97.572$, Cramer's $V = .185$, $P < .01$.

表3-4 学校説明会の開始時期と終了時期のクロス表

	学校説明会の最終時期					合計	
	10月	11月	12月	1月	2月		
学校説明会の開始時期	4月				1	1	
	5月		1	1		2	
	6月		4	3	4	11	
	7月		4	13	7	1	26
	8月	1	5	14	12	1	33
	9月	1		2	1		4
	10月			4	1		5
	11月				1		1
	合計	2	14	37	26	3	83

3.4 高校選択の悩み

表3-5(振返調査②)から、高校選択の悩みは「高校進学後の心配」と「高校選択できない悩み」の2主成分となり、この2主成分により、生徒を図3-4の4クラスタに分類できた。

表3-5 高校選択の悩みについての主成分分析

変数	第1主成分	第2主成分
どの高校が自分の適性や個性にあうかわからない	0.732	0.181
進学した高校でやっていけるかわからない	0.597	0.028
それぞれの高校の教育内容の違いがわからない	0.538	0.171
進学したい高校が見つからない	-0.141	0.727
それぞれの高校の合格レベルがわからない	0.198	-0.7
固有値	1.242	1.081
寄与率	24.839	21.623
累積寄与率	24.839	46.462

注: 因子抽出法: 主成分分析(相関行列)、回転なし、 $N=2989$ 、3つまで選択。

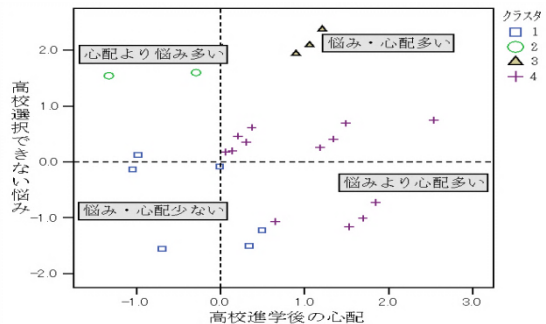


図3-4 高校選択の悩みについての4クラスタ分類による散布図

さらに、表3-6から、どの高校の学校説明会にも「どの高校が自分の適性や個性にあうかわからない」、「進学した高校でやっていけるかわからない」、「それぞれの高校の教育内容の違いがわからない」という高校進学後の心配を持った生徒が1/3以上参加していることが明らかになった。

表3-6 入試実倍率と高校選択の悩み4クラスタのクロス表

		4クラスタ				合計
		1 悩み・心配 少ない	2 心配より 悩み多い	3 悩み・心配 多い	4 悩みより 心配多い	
H23入試 実倍率 3段階	高位群	53.1%	9.9%	3.6%	33.4%	781
	中位群	46.9%	11.0%	5.2%	36.9%	1278
	低位群	46.2%	12.3%	4.5%	37.0%	930
	合計	1444	331	137	1077	2989

注： χ^2 ($df=6, N=2989$) = 12.301, Cramer's V = .045, $P < .10$.

3.5 高校選択の情報

図3-5（振返調査③⑦⑧）にある、「大切な要素」を学校説明会への期待度、「役立った内容」を学校説明会に参加したときの満足度とし、期待度と満足度の差をみることで、学校説明会における各項目の効果を検証できると考えた。

その結果、学校説明会で期待以上に効果のあった項目は、「類型やコースがある」、「施設設備がよい」、「伝統校風がよい」、「興味ある行事がある」、「進学実績がよい」、「選抜基準が自分にあう」、「先生の感じがよい」、「先輩の感じがよい」であり、期待以下の効果であった項目は、「自分の学力にあう」、「通学に便利」、「やりたい部活動ができる」、「学校の評判がよい」、「校則が自分にあう」、「学力を伸ばせる」であった。特に、「自分の学力にあう」は、高校選択の大切な要素の筆頭であるのに、役立った効果が低い。

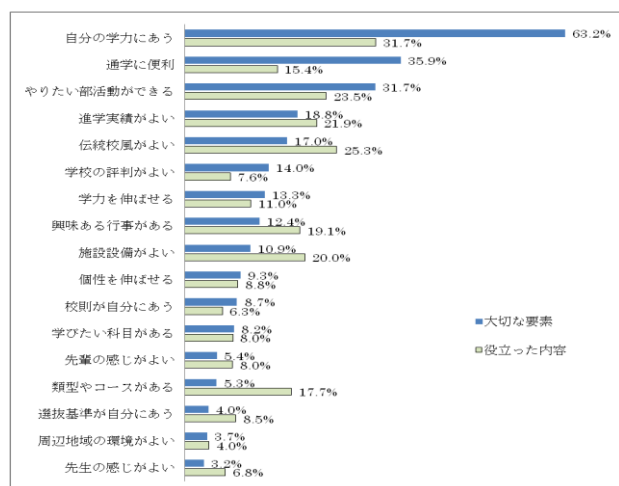


図3-5 役に立った学校説明会があった生徒の高校選択の大切な要素と学校説明会で役立った内容

表3-7(振返調査⑩⑬⑱)から有意な相関のある説明変数に◎を付した図3-6(提供調査①)で、◎印のうち学校説明会の目的の割合の高い項目を学校説明会で不正確な説明や印象を与えた可能性のある項目、割合の低い項目を学校説明会の内容として不十分であった可能性のある項目と考えた。

その結果、学校説明会で十分に説明すべき項目は、「校

則が自分にあう」、「自分の学力にあう」であり、より正確な説明や印象を必要とする項目は、「学力を伸ばせる」、「やりたい部活動ができる」、「興味ある行事がある」、「個性を伸ばせる」、「伝統校風がよい」、「先輩の感じがよい」、「先生の感じがよい」、「学校の評判がよい」であった。

表示はないが、「校則が自分にあう」という印象(振返調査⑩)と偏差値3段階のクロス表から、「校則が自分にあう」という印象が「違っていた」生徒は、偏差値下位群の高校に多いことが明らかになった。

表3-7 学校説明会の印象と現在の印象の相違度を従属変数とする重回帰分析

説明変数	β	γ
自分の学力あうダメー	0.06 ***	0.16 ***
学力伸ばせるダメー	0.09 ***	0.28 ***
進学実績がよいダメー	0.01	0.20 ***
類型やコースあるダメー	-0.01	0.15 ***
選抜基準が自分にあうダメー	0.00	0.21 ***
学びたい科目があるダメー	-0.03	0.17 ***
個性を伸ばせるダメー	0.12 ***	0.33 ***
やりたい部活動ができるダメー	0.06 ***	0.23 ***
興味ある行事があるダメー	0.04 *	0.26 ***
伝統校風がよいダメー	0.10 ***	0.32 ***
学校の評判がよいダメー	0.06 ***	0.30 ***
先輩の感じがよいダメー	0.06 ***	0.25 ***
先生の感じがよいダメー	0.11 ***	0.34 ***
校則が自分にあうダメー	0.13 ***	0.32 ***
施設設備がよいダメー	0.03	0.20 ***
通学に便利ダメー	0.02	0.12 ***
周辺地域の環境がよいダメー	0.01	0.18 ***
R^2	0.25 ***	
Adj. R^2	0.25 ***	
N	2103	

注： β は標準偏回帰係数、 γ は相関係数。*** $P < 0.01$, ** $P < 0.05$, * $P < 0.10$.

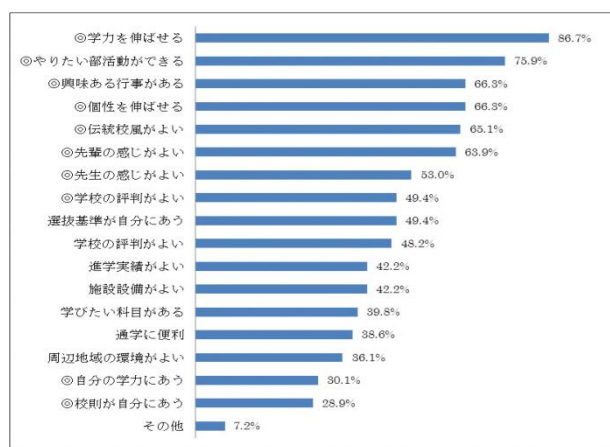


図3-6 学校説明会の目的の割合(◎:表3-7で有意な説明変数)

3.6 学校説明会の在り方

表3-8(提供調査②③⑥⑦⑧)から、入試実倍率と「学校説明会の実施時間」に負の相関があり、「大学進学率」に正の相関がある。学校説明会の「実施回数」、学校説明会の「実施期間」、「実施に要した人手」、「実施経費」、「校内のみ実施」の影響はみられなかった。他の説明変数の採用も検討したが、表3-9(振返調査③)から多重共線性が生じるため、2つのみの採用となった。

また、表3-10(振返調査⑩提供調査⑥)から、学校説明会の実施時間が短いことは、学校説明会の印象の正しさを高める効果があると考えられる。

表3-8 入試実倍率を従属変数とする重回帰分析

説明変数	β	γ
学校説明会の実施回数 (/年)	0.16	0.28 ***
学校説明会の期間	-0.16	-0.13
学校説明会の平均実施時間 (分)	-0.35 ***	-0.30 ***
学校説明会実施に要した人手 (/年)	0.14	0.16 *
学校説明会実施経費 (千円/年)	0.05	0.13
学校説明会の校内のみ実施ダミー	0.07	-0.12
最寄駅からの「道のり」距離 (Km)	0.06	-0.15 *
H23大学進学率	0.46 ***	0.48 ***
R^2	0.41 ***	
Adj. R^2	0.34 ***	
N	81	

注: β は標準偏帰係数、 γ は相関係数。*** $P<0.01$ 、** $P<0.05$ 、* $P<0.10$ 。

表3-9 説明変数の検討について

振返調査③「大切な要素」から	検討した説明変数	多重共線性	採用
・「自分の学力にあう」	在籍高校の偏差値	あり	×
・「通学に便利」	「間 (15) 最寄駅からの『道のり』距離 (Km)」		○
・「やりたい部活動ができる」	在籍高校の部活動加入率	あり	×
・「進学実績がよい」	在籍高校のH23大学進学率	あり	○
・「伝統校風がよい」	在籍高校の創立年数	あり	×
・「学校の評判がよい」	在籍高校のH23大学進学率	あり	×
・「学力を伸ばせる」	在籍高校のH23大学進学率	あり	×

表3-10 学校説明会の実施時間と学校説明会の現在の印象の正しさのクロス表

	学校説明会と現在の印象		合計
	とても正しかった	それ以外	
学校説明会 短い	17.1%	82.9%	1123
実施時間 中	14.7%	85.3%	794
3段階 長い	12.1%	87.9%	306
合計	346	1877	2223

注: $\chi^2 (df=2, N=2223) = 5.231$ 、Cramer's $V = .049$ 、 $P < .10$ 。

図3-5で大切な要素である「通学に便利」は、自宅からの便のよさであり、学校説明会の内容とする必要はないと考えられる。また、表3-11(振返調査⑤)から、学校説明会の参加対象は、学校説明会の目的にもよるが、高校からバスや自転車も含め通学時間1時間30分以内とすることで、95%以上の生徒がその対象となる。

表3-11 入試実倍率3段階と通学時間のクロス表

	現在の高校までの通学時間は					合計
	30分未満	30分以上1時間未満	1時間以上1時間30分未満	1時間30分以上2時間未満	2時間以上	
H23入試実倍率 3段階	31.3%	40.2%	25.0%	3.1%	0.5%	777
高位群	38.2%	38.7%	19.9%	2.7%	0.6%	1266
中位群	38.8%	44.6%	15.3%	1.1%	0.2%	921
低位群	1083	1213	587	68	13	2964

注: $\chi^2 (df=8, N=2964) = 42.98$ 、Cramer's $V = .085$ 、 $P < .01$ 。

3.7 学校説明会と受験勉強

中学3年生の10月に志望校を決定していた進学意識の高い生徒を対象にした表3-12(振返調査⑪⑫)から、学校説明会に参加した生徒の高校入試を意識した勉強を始める時期が早い傾向にあることが明らかになった。

表3-12 現在の高校を第1志望にしていた生徒の学校説明会の参加と受験勉強を始めた時期のクロス表

	した 学校説明会に 参加 しなかった	高校入試を意識した勉強を始めた時期					合計
		中学入学以前	中学1年生のころ	中学2年生のころ	中学3年生の4月から8月	中学3年生の9月から12月	
現在の高校を第1志望にしていた生徒	0.6%	0.9%	5.0%	47.5%	36.3%	9.8%	1428
現在の高校を第2志望にしていた生徒	1.1%	0.6%	4.5%	36.3%	39.7%	17.9%	179
合計	10	14	79	743	589	172	1607

注: $\chi^2 (df=5, N=1607) = 15.575$ 、Cramer's $V = .098$ 、 $P < .01$ 。

3.8 人気校と準人気校の情報提供

現在通っている高校の学校説明会に参加した生徒のう

ち、入試倍率の高位群かつ偏差値の上位群に属する13校の生徒を対象にした表3-13(振返調査⑬⑭⑮)から、準人気校は、人気校(不合格者の多い高校)にはあり準人気校にはない項目「学力を伸ばせる」を学校説明会の内容とし、入学以降も「学力を伸ばせる」という印象を生徒が「正しい」と感じるように努めることが人気校になる方策の一つと考えられる。

表3-13 学校説明会の印象と現在の印象の正確度を従属変数とする重回帰分析

説明変数	モデル1 (人気校)		モデル2 (準人気校)	
	β	γ	β	γ
自分の学力にあうダミー	0.02	0.15 ***	0.25 ***	0.24 ***
学力を伸ばせるダミー	0.22 ***	0.31 ***	0.12	0.33 ***
進学実績がよいダミー	0.00	0.15 ***	0.02	0.16 **
類型やコースがあるダミー	0.00	0.09 *	-0.11	-0.12 *
選抜基準が自分にあうダミー	-0.08	0.09 *	-0.03	0.09
学びたい科目があるダミー	-0.02	0.10 *	0.03	0.17 **
個性を伸ばせるダミー	0.03	0.24 ***	0.22 **	0.40 ***
やりたい部活動ができるダミー	0.20 ***	0.32 ***	0.17 **	0.32 ***
興味ある行事があるダミー	-0.01	0.17 ***	0.08	0.27 ***
伝統校風がよいダミー	0.09	0.26 ***	0.17 **	0.37 ***
学校の評判がよいダミー	0.08	0.22 ***	0.09	0.33 ***
先輩の感じがよいダミー	0.00	0.20 ***	-0.23 ***	0.09
先生の感じがよいダミー	0.03	0.21 ***	0.03	0.26 ***
校則が自分にあうダミー	0.01	0.18 ***	0.09	0.27 ***
施設設備がよいダミー	0.08	0.20 ***	-0.08	0.16 **
通学に便利ダミー	0.08	0.17 ***	-0.08	0.09
周辺地域の環境がよいダミー	0.08	0.21 ***	0.17 **	0.28 ***
R^2	0.23 ***		0.41 ***	
Adj. R^2	0.17 ***		0.34 ***	
N	259		151	

注: β は標準偏帰係数、 γ は相関係数。*** $P<0.01$ 、** $P<0.05$ 、* $P<0.10$ 。

3.9 高校選択と塾

図3-1(3.2)から、高校選択の情報源として、塾は中学校と同等の役割のあること、図3-7(振返調査⑩)から、高校選択の最終決定にも、塾の先生が中学の先生と同等の影響のあることがわかる。

また、図3-8(振返調査④)から、学校説明会・中学校・塾のいずれかまたはそれ以上を高校選択の情報源としている生徒の合計は86.9%になる。

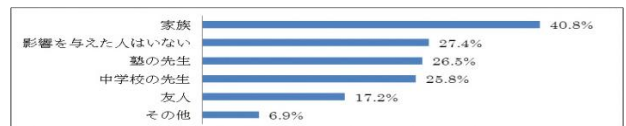


図3-7 志望校の最終決定に影響を及ぼした人

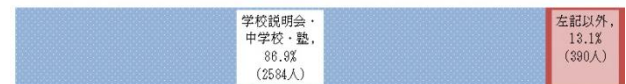


図3-8 高校選択の情報源における学校説明会・中学校・塾とその他の割合

4. 研究のまとめと政策提言

本研究の結果を踏まえ、新たな予算措置を要しないことを前提に、3つの政策提言をする。

提言1 中学生の高校選択における学力判断の新たな情報として、埼玉県教育委員会は、入学者選抜における学力検査結果を中学校に提供することを検討するべきである。

偏差値を利用しない生徒の志望校決定が遅くなり、卒業率等に影響を与えている可能性があることから、偏差値に代わる学力判断の新たな情報を中学生の高校選択のために提供することが必要である。また、「自分の学力にあう」は高校選択の大切な要素であり、中学生が順位や偏差値を知るだけではなく、中学校の日常の教育活動や進路指導と結びつくことが重要である。

(1)検討案1「学力検査の結果を中学校に直接提供する」

入学者選抜の学力検査の結果(各受験生の得点と各高校の得点分布)を中学校へ提供する。中学校はこのデータを蓄積し、日常の教育活動や進路指導と結びつけ、進学指導や高校選択への情報提供に資することが期待できる。

(2)検討案2「簡易開示された学力検査得点を利用する」

検討案1が実施までに時間を要する場合の対応策が検討案2である。埼玉県では、学力検査得点の簡易開示を実施しており、受験生本人から得点を収集し、その得点を中学校が進路データとして利用することができれば、検討案1に準じた効果が期待できる。

提言2 中学生の高校選択の現状に対応した情報提供の場となるよう、高校は、学校説明会の対象・時期・内容について再検討するべきである。

高校の情報提供が不十分であることから、学校説明会の再検討すべき視点を以下に示す。

(1)対象について

- ①どの時期にも、高校選択を考え始めた時期の生徒と決定する時期の生徒が混在することを意識しているか。
- ②参加している1/3以上の生徒が持つ高校選択の悩み「高校進学後の心配」に対応できているか。
- ③通学時間が1時間30分以内の生徒を対象にしているか。

(2)時期について

- ①高校選択を考え始めた時期の生徒を対象にしたものであれば、「中学3年生の4月から8月」になっているか。その際、中学校2年生を対象にすることを検討したか。
- ②学校説明会の内容が高校選択を決定する時期の生徒を対象にしたものであれば、「中学3年生の9月から12月」になっているか。

(3)説明内容等

- ①実施時間が必要以上に長くなっていないか。
- ②表4-1に照らし、内容が自校の目的に合っているか。

提言3 多くの中学生に高校選択の情報を提供するための新たなチャンネルとして、高校は、塾との連携について検討するべきである。

塾を高校選択の情報提供の場を含めることで、学校説明会、中学校と合わせて、中学生の約9割への情報提供が可能となる。ただし、便宜供与ととられかねないように留意

する必要がある。

(1)検討案1「塾に学校説明会での情報を提供する」

高校の学校説明会の内容を塾に情報提供し、塾を媒体とした情報提供を行うものである。塾の先生が各高校について確かな情報を持つことで、塾での進路相談やアドバイスに役立ち、学校選択に資することが期待できる。

(2)検討案2「塾対象の学校説明会を実施する」

中学生対象の学校説明会に加え、塾対象の説明会を実施し、塾を媒体とした情報提供を目指し、塾での進路相談やアドバイスに役立ててもらうものである。中学生対象の学校説明会に塾にも参加してもらったり地区ごとに複数の高校が共催して同時開催することも効果的である。

表4-1 学校説明会の情報提供項目における再検討の視点

学校説明会の情報提供項目	中学生の期待以上の効果 【維持・拡充】	中学生の期待以下の効果 【改善】	もっとも 説明が必要 【改善】	より正確な説明 や印象が必要 【要改善】	備考
自分の学力にあう		●	●		中学生の高校選択に大切な要素1位の項目
学力が伸ばせる		●		●	学校説明会の目的1位の項目 人気校にあり単人気校にない項目
進学実績がよい	○				入試合格率と相関ある項目 人気校と単人気校の共通項目
類型やコースがある	○				
選抜基準が自分にあう	○				
学びたい科目がある					
個性を伸ばせる				●	人気校にない単人気校にある項目
やりたい部活動ができる		●		●	中学生の高校選択の大切な要素3位の項目 学校説明会の目的2位の項目
興味ある行事がある	○			●	学校説明会の目的3位の項目
伝統校風がよい	○			●	人気校にない単人気校にある項目
学校の評判がよい		●		●	第3者の評価を伴うので難しい項目
先輩の感じがよい	○			●	
先生の感じがよい	○			●	
校則が自分にあう		●	●		偏差値下位群の高校に多い項目
施設設備がよい	○				
通学に便利		●			説明項目として不必要
周辺地域の環境がよい					

注：○印は維持・拡充すべき項目、●印は改善すべき項目であり、○と●両方がある項目は、各高校の学校説明会の実施内容により、いずれを重視するかの判断が必要である。

おわりに

研究結果を踏まえて、3つの政策提言を行った。特に、提言2のうち、学校説明会の説明項目の再検討については、単に説明内容を改善するだけではなく、各高校の教育活動全般がその説明項目に匹敵する内容になるよう、各高校は不断の改善と維持拡充に努める必要がある。

また、政策提言に関し、今後必要となる研究について1点触れておきたい。それは、いわゆる「輪切り」批判への検証である。学力判断の新たな情報の提供を提言したが、このことも当然に「輪切り」批判の対象となろう。「輪切り」批判は、1点刻みの差で合否が分かれることに対する批判である。実際には、入学者選抜であるため、どこかの点数で合否が分かれることは仕方ないことであるが、この批判に対する検証を行う必要がある。つまり、学力の幅の大きい集団と学力の幅の小さい集団と教育効果に違いがあるのか、また、どちらの集団の教育効果が高いのかの検証である。この点については、今後の研究に期待したい。